

西豪州日本クラブでの離任挨拶(2月15日)

着任して2年5ヶ月の間、大変楽しく充実した日々をおくることが出来ました。着任後すぐに岸田総理をパースにお迎えできたこともそうですが、コロナ禍の収束後の人の交流が大きく広がる時期と重なったことも手伝い、皆様と一緒に数多くの前向きな仕事できたのは大変恵まれていました。

パースでの勤務を通じて多数の定住者の皆様にお会いすることができました。海を越えてパースの地をわたり、それぞれ大変なご苦労やご経験を重ねながらお互いに助け合い、たくましく、楽しみながら、日豪両国を支えて来られた皆様に感銘を受けることが数多くありました。

ひとつの例は、砕氷艦しらせです。1965年の砕氷艦ふじの時代から当地日本人社会の方々はフリーマントルの岸壁に出迎えと見送りに出かけておられます。雨の日も風の日も欠かさず日豪両国の国旗をふりに行った賀陽敬真先生の心意気は小松崎会長に受け継がれ、しらせの入港・出港時には必ずサポーターの方々が誘って旗振りにでかけられています。

昨年末のしらせ見送りには自分も参加させて頂きました。ノビさんが和太鼓を叩き、「イッテラッシャーイ」の掛け声に、しらせの甲板に勢揃いした乗組員の方々が帽子を回して応じ、汽笛が鳴りました。フリーマントルから乗船した南極観測隊のご家族の方々も見送りに参加し、オレンジ色の船体が見えなくなるまで一緒に手をふりました。水先案内船が港に戻って来るさらにその先をイルカが嬉しそうに飛び跳ね、感動で涙を流す方もいました。

いま小松崎会長よりリマインドがありましたが、しらせは今度は2月23日にフリーマントル入港予定で、出迎希望者は午前9時に岸壁集合とのことです。

もうひとつは「パース音頭」です。東京出身なので、パース日本祭りでは大東京音頭を踊りましょうと提案したところ、「ここはパースなのでパース音頭をつくりたいです」と言って、本当にわずか2週間でパース音頭を仕上げてしまったのには驚きでした。当地定住者の故・藤音彦さんが作詞された詩に、林せつ子さんが作曲し、パース由来の踊りをマッカーサー千里先生が振付け、三枝さんが歌い、亜也さんが太鼓を叩く「パース音頭」が見事完成しました。日本祭りで、楽しそうな日本の空間に飛び入り参加するオーギー達の輪が果てしなく広がる景色は、日豪友好の輪をみているようで感動的でした。

パースを愛する先輩たちの心意気は若い世代に着実に受け継がれています。日本と豪州の友好発展のため、日々架け橋となって行動されている皆様に心より深い敬意を表します。

日本と西豪州の間に長年かけて築かれてきた人と人との絆は、最も重要なアセ

ットとなっております。

昨夜は、総領事公邸で開催した天皇誕生日祝賀レセプションの席で、アルン・ラダ・クリシュナン先生に旭日小授章を転達させて頂きました。クリシュナン先生は、1973年に西豪州大学(UWA)に日本の社会経済と日本語を同時に教える日本研究コースを設置され、50年にわたり、UWAとマードック大学で教え、多数の人材を育成されました。実に多くの指導者が輩出され、そのひとりひとりが日本と西豪州の人的関係を広げました。1973年は、上皇上皇后両陛下がパースを訪問され、日豪関係が急速に進展したのと同時期ですので、昨夜は特別な縁を感じました。

今年も日本と西豪州との関係ではイベントが盛り沢山です。悲願のパース・成田直行便が再開し、去年の豪州からの訪日者数が史上最高の92万人に飛躍するなか、今年は、大阪関西万博が開催され、パースでは10月に日豪経済会議、6月5日にはFIFAワールドカップ予選の日豪対決、3月15日のパース日本祭りと目白押しであり、来週には砕氷艦しらせも再訪します。西豪州を舞台に、日豪関係がさらに発展することを願っております。

本日は、クワイアさくらの皆様による「もみじ」と「ふるさと」のコーラス、心にしみて感動しました。パースに戻って来られた亀井南央さんの筑紫舞にも感銘を受けました。パース日本祭りやその他の文化交流の機会においてご活躍されることを願っております。

西豪州と日本との友好増進のため当館と引き続き緊密に協力をさせて頂ければ幸いに思います。西豪州日本クラブのさらなる発展を願っております。

家内晴美ともども大変お世話になり本当にありがとうございました。

(了)